



「妙高市民の心」作文 優秀作品集（中学年の部）

最優秀賞

がんばれ じいじ

斐太北小学校4年 赤間 慎

去年の秋、ぼくといここで走る練習をしていた。すると、じいじが来て、走るのをみせてやると言って走り出した。じいじは昔から走るのがとく이었다からだ。でも、じいじは走り終えたら急にころんで起き上がれなくなってしまった。ぼくはあわててとんでいってじいじのめがねを拾ってわたした。うつぶせになったままでほっぺからは血が流れて小指が変なふうに曲がっていた。そして、はあはあと息を切らしていた。ばあばがじいじを起こして家の中に連れていき、じいじを病院に連れて行った。ぼくはじいじがどうなったかとても心配だった。じいじはのうの両がわにあなをあけて血をぬいたそうだ。ぼくは頭にあなをあけるなんてこわいと思った。

たい院してからじいじの様子がかわった。のうがこんらんしているようだった。たとえば自分が今どこにいるのか分からなくなったりぼくの家もどこにあるのか分からなくなっていた。人の名前もわすれてしまうことがあり、姉を母とまちがえてよんだりするようになった。洋服の着がえもまちがえることがあり、シャツをはこうとしたり洋服を後ろ前に着たりすることもあった。ぼくは、今までできていたことができなくなってしまふことがあるなんてびっくりしてしまった。

じいじは、こまっているようだった。何とかしようとのうトシの本をやったりウォーキングをしたり新聞をよんだりしてのうのはたらきが悪くなるのをおそくしようがんばっていた。もちろん薬も飲んでいた。ぼくは、わすれた人の名前を教えてやったり、おふろにいっしょに入って着がえを見守ったりおふろにわすれてきたひげそりや石けんをとりにおいてやったりした。ぼくがーしょにおふろに行くとじいじはとてもよろこんだ。

じいじはこれからもっとできないことがふえてくるかもしれない。ぼくに出来ることはやり、じいじが楽しくすごせるように見守っていきたいと思う。





優秀賞

私に出来る人の役に立つ事

新井中央小学校4年 藤井 咲良

みなさんは、ヘアドネーションという言葉を知っていますか。ヘアドネーションとは、がんや生まれつきかみの毛が生えてこない病気、事故などで、かみの毛を失った子どものために、寄付されたかみの毛でウィッグを作り、あげる活動のことです。

小学校一年生の時、何か人の役に立つようなお手伝いをしたいと、母に言ったら、

「咲良はまだ小さいから、自分一人で人の役に立つことをするのはむずかしいと思うよ。でも、咲良のかみの毛は生まれつき量が多くてきれいだから、ヘアドネーションで寄付すると喜ばれるかもしれないね。」と言われました。

私は、この時初めてヘアドネーションという言葉を知りました。確かに、かみの毛をのばして、そのかみの毛を送るだけならかんたんです。私でもできるなと思い、その時からかみの毛をのばし始めました。しかし、かみの毛がのびてくると、もともとかみの毛の量が多かった私は、その大変さを感じ始めました。まず、お風呂に入った時に、かみを洗うのが大変でした。自分では洗えたと思っても、母にしっかり洗えてないよと言われてしまうことがありました。お風呂から出て、かみの毛をかわかすのも、長くなった分だけ多くの時間がかかります。短く切った方が楽になるかなと何回も思いながら、なんとか二年以上かみの毛をのばしました。

今年の三月、寄付できる三十一センチ以上になりました。母に美容院の予約をしてもらい、ついにヘアドネーションカットをしてもらいました。二年半ぶりにかみの毛を切ったら、頭がすごく軽くなりました。切ったかみの毛を自分でポストに入れて寄付の完了です。

一か月後にありがとうというシールが届きました。ヘアドネーションは、少し大変だけど、私にできるだれかのために役に立つことでした。私のかみの毛で、だれかが笑顔になってくれたと思うと、うれしいです。





優秀賞

こまっている人を笑顔に

妙高高原南小学校4年 田中 航介

登校する時、集合場所で、いつもごみ捨てに来ているおじいさんに会います。おじいさんは、いつもおなかをおさえながら歩いています。ぼくが、
「おはようございます。」

とあいさつをすると、あいさつを返してくれます。だけど、いつも苦しそうで、ぼくは心配になります。ごみ出しを手伝いたいと思うけれど、勇気が出なくて声がかけれません。

僕の家には、おじいちゃんとおばあちゃんがいます。時々、
「いっしょに畑に行こう。」

とさそわれるので、ついていきます。野菜をとっては集めるのをくり返すので、とても大変です。ぼくは少しでも役に立つようにお手伝いをします。

ある日、その元気なおじいちゃんが病気になって入院しました。ぼくは、いつもいるおじいちゃんが家にいなくなってさびしい気持ちになりました。病院にいるおじいちゃんは、

「大じょうぶだよ。」

と言っていました。少し安心したけれど、やっぱり心配でした。今は、元気になって、また畑仕事や仕事に行っています。ぼくと一しょに遠くまで自転車で行ってくれることもあります。みんな元気だとぼくもうれしいです。

「航介は、生まれたとき小さくて、たくさんの方が助けてくれたんだよ。」とお父さんやお母さんからよく聞きます。だから、おじいちゃんおばあちゃん、こまっている人を助けたり元気づけたりしたいです。

朝、集合場所で、あのおじいさんに会いました。やっぱりおなかをおさえています。

「ごみ出しを手伝います。」

勇気を出して声をかけました。おじいさんは、

「ありがとう。」

と笑顔で言ってくれました。声をかけてよかったと思いました。これからも、





こまっている人やお年よりの人が笑顔になれるようがんばります。

